

タイトル	ドロイゼンの「探究的理解」について
著者	安酸, 敏眞; YASUKATA, Toshimasa
引用	年報新入文学(07): 166-214
発行日	2010-10-25

ドロイゼンの「探究的理解」について

安酸 敏眞

序

一八五七年の夏学期、当時まだイエーナ大学にいたドロイゼンは、「歴史学のエンチクロペディーおよび方法論」(Historische Enzyklopädie und Methodologie)と題する講義をはじめて行なった。これは歴史学の理論・課題・方法などについて包括的に論じたものであって、彼はその後、母校ベルリン大学で教鞭を執るようになってからも同様に、一八八二／八三年の冬学期に至るまで、同じ主題に関する講義を都合十七回行なっている⁽¹⁾。題目は「歴史学のエンチクロペディーおよび方法論」(Historische Enzyklopädie und Methodologie) (一八五七年夏学期、一八八一年夏学期)、「歴史学のエンチクロペディー」(Historische Enzyklopädie) (一八五八年夏学期、一八五九年夏学期、一八五九／六〇年冬学期)、「歴史学の方法論およびエンチクロペディー」(Historische Methodologie und Enzyklopädie) (一

八六〇／六一一年冬学期、一八六三／六四年冬学期、一八六五年夏学期、一八六八年夏学期、一八七〇年夏学期、一八七二年夏学期、一八七九年夏学期)、「史学論あるいは歴史学的諸学問の方法論およびエンチクロペディー」(Historik oder Methodologie und Encyklopädie der historischen Wissenschaften) (一八六二／六三年冬学期)、「歴史研究の方法論およびエンチクロペディー」(Methodologie und Encyklopädie der Geschichtsstudien) (一八七五年夏学期)、「歴史的諸学問の方法論およびエンチクロペディー」(Methodologie und Encyklopädie der historischen Wissenschaften) (一八七六年夏学期)、「歴史の方法論およびエンチクロペディー」(Methodologie und Encyklopädie der Geschichte) (一八七八年夏学期、一八八二／八三年冬学期)と、学期によって微妙に異なっており、また講義の本身にもその都度新たに手が加えられたということである。しかし全体としての構想に大きな変化はなく、一連の講義は今日では「史学論」(Historik) 講義として一括して扱われている。学生時代にドロイゼンのこの講義に列席した経験をもつ偉大な学者としては、ヴィルヘルム・ディルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833-1911) 、ゲオルク・ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) 、フリードリヒ・マイネッケ (Friedrich Meinecke, 1862-1954) などがいる⁽²⁾。

ドロイゼンはみずからの手で『史学論』を世に出すことはしなかったが、その代わりに受講者の便宜をはかるために、講義の概要ないし骨子を簡潔に綴った『史学綱要』*Grundriss der Historik* を、一八五七年(あるいは一八五八年)と一八六二年の二回にわたって、手書きの草稿の簡易印刷版のかたちで公にした。この小冊子のはちに組版に回され、一八六八年にはその第一版が、一八七二年にはほぼそのままのかたちの第二版が、そして一八八二年には大幅に加筆修正された第三版が出版されている⁽³⁾。講

義録そのものの方は、一九三七年に彼の孫にあたる歴史学者ルードルフ・ヒュプナーによつて、遺された各回の講義ノートに基づいて一冊の書物に編集され、『史学論—歴史のエンチクロペディーおよび方法論に関する講義—』*Historik. Vorlesungen über Enzyklopädie und Methodologie der Geschichte* (München: R. Oldenbourg, 1937) として刊行された⁽⁴⁾。これは『史学綱要』の第三版をもその一部に含んでおり、ドロイゼンの歴史学理論の概要を知る上できわめて重要な書物と見なされてきたが、そこに大きな問題が潜んでいたこともまた否めない。というのは、当然のことながらこのような編集作業によつて、ドロイゼンの歴史学理論における思想発展や構想の深まりといった点が、遺憾ながら曖昧にならざるを得なかったからである。そこで彼の「史学論」構想の「発展史」(Entwicklungsgeschichte)を精確に跡づけるために、ペーター・レイとホルスト・ヴァルター・ブランケによつて研究プロジェクトが立ち上げられ、目下三卷五分冊プラス補卷のかたちで『史学論』の「歴史Ⅱ批判版」(historisch-kritische Ausgabe)が刊行されつつある(現時点では、第一卷、第二卷(二分冊)、補卷がすでに刊行されており、第三卷(二分冊)は本年中に刊行される予定である)⁽⁵⁾。この「歴史Ⅱ批判版」は、十七回の各講義を完全な仕方で再現することを目指しているわけではなく、またそれは実際上不可能でもあるが、しかしその第一卷は一八五七年の最初の講義を完全な仕方で再現してみせ、また未刊行の第三卷は、著者自身による最終的な直しを反映した、「最後の手になる史学論」(die Historik letzter Hand)の再構成を企図している⁽⁶⁾。

こういう事情にあるとすれば、資料面からして現時点ではまだ確定的な研究はなし得ないが、それを承知の上で、われわれはドロイゼンの『史学論』について、とくに彼の「探究的理解」と称されるもの

について、以下に考察してみたい。

一

ヨーハン・グスタフ・ドロイゼン (Johann Gustav Droysen, 1808-1884) は、一八〇八年七月六日に、ボンメルンの小都市トレープトール (Treptow、今日の Trzebiatów) に従軍牧師の息子として生まれた。一八二六年に、シュテッティンのギムナジウムを卒業した後、彼はベルリン大学に進学し、古典文献学の分野で博士の学位と教授資格を取得した。在学中の彼に最も大きな影響を与えたのは、古典文献学者のアウグスト・ベーク (August Boeckh, 1785-1867) と哲学者のヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) であった。実際、ドロイゼンは、一八二六年の夏学期から一八二七／二八年の冬学期にかけて、ベークの六種類の講義を受講し、一八二七年夏学期には彼の文献学のゼミナールを履修しているが⁽⁷⁾、他方で一八二七年の夏学期から一八二八／二九年の冬学期にかけて、ヘーゲルの授業を六つ受講している事実が、いかにこの若き学徒が高名な哲学者に魅了されたかを物語っている⁽⁸⁾。それゆえ、一八三一年一月にヘーゲルが急逝したときには、ドロイゼンが心に激しい動揺を覚えたこともよく理解できる⁽⁹⁾。学生時代のドロイゼンに関して特記すべきもう一つのこととは、彼がベークの紹介で一歳年下のフェリックス・メンデルスゾーンの家家庭教師に就任し、この天才的作曲家と肝胆相照らして終生の友人となったことである⁽¹⁰⁾。

研究に關していえば、ドロイゼンはその第一段階として、古典期以後の古代ギリシアに的を絞って研

究し、ヘレニズム文化の世界史的意義をまさに見出した。『アレクサンドロス大王の歴史』 *Geschichte Alexanders des Großen* (一八三二年) と『ヘレニズムの歴史』 *Geschichte des Hellenismus* 二巻 (一八三六年と一八四三年) は、いまでは三巻セットの古典的名著と見なされている⁽¹¹⁾。「ヘレニズム」(Hellenismus) という用語に明確な概念規定を与え、これを歴史学的術語として確立したのは、ほかならぬドロイゼンであった。古典文献学者としては、彼はアイスキュロスやアリストファネスの翻訳も行なっており——『アイスキュロス著作集』全三巻 (一八三二年) と『アリストファネス著作集』全三巻 (一八三五—三八八年)——、いずれも今日なおその価値を失わぬ名訳とされている⁽¹²⁾。

ところで、ドロイゼンに関する信頼できる伝記記事を書いたオットー・ヒンツェによれば、ドロイゼンの生涯は「大きく三つの時期」に区分される。第一期は生まれてから一八四〇年まで、第二期は一八四〇年から一八五〇年まで、第三期は一八五〇／五一年から亡くなる一八八四年までである⁽¹³⁾。というのも、ドロイゼンは一八四〇年にキール大学からの招聘を受け容れて、住み慣れたベルリンを後にしたが、これによって彼の研究の重心は古代(ヘレニズム研究)から近代(政治史)へと大きく移行したからである。そののみならずキール時代のドロイゼンは、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン両公国に對するデンマークの政策に反對する政治活動に挺身し、フランクフルトの連邦議會でドイツ人側の臨時政府を代表したりもした。キール時代の代表作『自由のための戦争の時代に関する講義』 *Vorträge über das Zeitalter der Freiheitskriege* (一八四六年) は、一八四二—四三年に講義された内容が活字になったものであるが、いずれにせよ、彼はとくに一八四八の革命以降、プロイセンを中心としたドイツの国民国家的統一(小ドイツ的構想)を擁護する立場をとるようになった。「国民の大義はいまやプロイセン

の側にある。・・・ドイツの権力であることが、プロイセンの歴史的課題なのである」(Die Sache der Nation ist jetzt bei Preußen... Die deutsche Macht zu sein ist seine geschichtliche Aufgabe)⁽¹⁴⁾ という言葉は、これ以後のドロイゼンの政治的態度を直截に示している。

一八五一年、デンマークの報復措置に身の危険を感じたドロイゼンは、イエーナ大学からの招聘を受け容れて、その地に移り住むことになったが、そこでかねてより着手していた『陸軍元帥ヨルク・フォン・ヴァルテンブルク伯爵の生涯』*Das Leben des Feldmarschalls Grafen York v. Wartenburg* (一八五一年―五二年)を完成させた。ヨルクをプロイセン精神の鑑として称賛したこの本は、専門家筋の間では手厳しい批判が多かったが、巷間ではかなりの好評を博した。彼の歴史叙述における主著『プロイセン政治の歴史』*Geschichte der preussischen Politik* (一八五五―八六年)もこの時代に着手されたが、ベルリン大学からの招聘を受け容れて、一八五九年以降再びベルリンに住み着いてからは、専らプロイセンの公文書をフルに活用して、この書物を完成するために力を注いだ。未完に終わったとはいえ、五部全十四冊に及ぶ大著となったこのプロイセン政治史は、ドロイゼンの歴史家としての真骨頂をよく示しているといわれる。彼が歴史学における「プロイセン・小ドイツ学派の真の創設者にして創造者」⁽¹⁵⁾と呼ばれる所以でもある。

二

歴史家としてのドロイゼンの来歴は、ざっと以上のごとくであるが、本稿では考察の対象を『史学

論』に限定し、そのなかでもとくに「探究的理解」(forschendes Verstehen)と称されているものについて、その意味内容と学問的意義を解析してみたい。上述したように、『史学論』の最終版は現時点では未刊行なので、われわれは『史学綱要』の第三版を主たる資料として用い、それ以前の版との異同にも注意を払いつつ、また『史学論』のテクスト(一八五八年の講義、ヒュプナー版等)も必要に応じて参照して、ドロイゼンの「探究的理解」の特質を剔抉してみたい。

ギリシア語の *ἱστορικὴ* あるいはラテン語の *historice* に由来する「史学論」(*Historik*) という術語は、ドロイゼンがはじめて鑄造したものではない。それは *ars historica* や *Geschichtskunst* (*historische Kunst*) といった、より古くから存在する類語の長い歴史を背景として、科学としての歴史、つまり『歴史学』が出現する十九世紀前半に登場してくるもので⁽¹⁶⁾、例えば文学史家・文化史家の G・G・ゲルヴィヌスは一八三七年に、『史学論の概要』(*Grundzüge der Historik*) なる書物をすでに刊行している⁽¹⁷⁾。ドロイゼンの師にあたるアウグスト・ベークも『文献学的諸学問のエンチクロペディー』ならびに方法論⁽¹⁸⁾」のなかで、「歴史研究の理論あるいは史学論 (*Historik*) は、歴史の理念と目的ならびに歴史学的技法の本質を、方法および叙述との関連において、論究しなければならない⁽¹⁸⁾」、と述べている。ここからもわかるように、*Historik* は「歴史研究の理論」を表すものとして、十九世紀の中葉には学術用語としての市民権を獲得している⁽¹⁹⁾。それが意味しているのは、「専門の歴史学によるみずからの学問性の諸原理についての体系的な自己省察⁽²⁰⁾」とでもいえるものである。ドロイゼンが「史学論」の講義を実際に行なったのは一八五七年が最初であるが、実はその五年前の一八五二年に、彼は盟友のハインリヒ・フォン・シーベル (Heinrich von Sybel, 1817-1895) に宛てた書簡のなかで、すでにその構想を

打ち明けている。

・・・もはや誰も理想の力を信じないし、ナポレオンのな高等工業学なるものがドイツの諸学問に巣くつている。

ソノ声二応ジテ。当地で蔓延しているこのような傾向——イエーナにおける最も賢明な同国人たちが、顕微鏡と秤だけが学問であり、自分たちの唯物論的方法が方法一般である、とすでに教えているが、これはかつてヘーゲルの弟子たちが、哲学をこねくり回して同様のことを行ない、遂にはそのせいで哲学が窮地に陥ったのと同じである——これに立ち向かうために、わたしはこの夏〔学期〕に「歴史学の方法論およびエンチクロペデー」について講義するであろう。⁽²¹⁾

実際にはこの計画は一八五七年まで延期されたが、ドロイゼンの「史学論」は、当時蔓延しつつあった実証主義的・唯物論的風潮に対抗して、歴史学の学問的理想と方法について批判的考察を加えようとしたものであったことが、ここから窺い知ることができる。いずれにせよ、『史学綱要』の第三版によれば、「史学論」は「歴史的思考ならびに研究のオルガノン」(ein Organon des historischen Denkens und Forschens)⁽²²⁾ という役割を担っている。「オルガノン」(ὄργανον) とは、一般的には「機関」ないし「道具」を意味するが、ここに込められた特別な意味を理解するためには、この用語にまつわる哲学史的背景を考慮に入れなければならない。周知のように、アリストテレスの後継者たちは彼の論理学の諸著作を「オルガノン」と呼んできたが、それは彼らが論理学を哲学の一部門ではなく、哲学のための特

別な道具であると考えたからである。例えば、大工が用いる道具には鋸や鉋のほかには物差しや墨縄などもあるが、鋸や鉋が木材を直接に切ったり削ったりする道具であるのに対して、物差しや墨縄は鋸や鉋を有効に使うための、線引き作業の道具である。彼らによれば、哲学における論理学はいわば後者の部類に属する道具であって、それは学問的探究や哲学的議論のための道具の、そのまた道具のようなものだといのである。ドロイゼンのここでの用語法もこれに準拠しており、「史学論」が「歴史的思考ならびに研究のオルガノン」であるということは、それが歴史的思考と研究についての〈反省の反省〉、〈理解の理解〉という、メタレベルの議論を含むものだということである。換言すれば、「史学論」は一種のメタ歴史学だということである。「史学論」の課題は、歴史学的研究において適用されるすべての方法を「それらに共通する思想で総括し、それらの体系、それらの理念を展開し、かくして歴史の法則ではないが、しかし歴史的研究ならびに知識の法則を確定すること」⁽²³⁾である。

ちなみに、『史学綱要』の第三版の実際の構成を示せば、以下の通りである。

緒論 (Einführung)

序論 (Einleitung)

1. 歴史 (Die Geschichte) § 1—§ 7
2. 歴史的方法 (Die Historische Methode) § 8—§ 15
3. 史学論の課題 (Die Aufgabe der Historik) § 16—§ 18

方法論 (Die Methodik)

§ 19

1. 発見法 (Die Heuristik) § 20—§ 27

2. 批判 (Die Kritik) § 28—§ 36

3. 解釈 (Die Interpretation) § 37—§ 44

体系論 (Die Systematik)

§ 45—§ 49

1. 素材より見た歴史的著作 (Die Geschichtliche Arbeit nach Ihren Stoffen) § 50—§ 54

2. 形式より見た歴史的著作 (Die Geschichtliche Arbeit nach Ihren Formen) § 55—§ 71

3. 作者より見た歴史的著作 (Die Geschichtliche Arbeit nach Ihren Arbeitern) § 72—§ 79

4. 目的より見た歴史的著作 (Die Geschichtliche Arbeit nach Ihren Zwecken) § 80—§ 86

トポス論 (Die Topik)

§ 87—§ 95

以上の全体構成に明確に見てとれるように、「史学論」は(1)「歴史的研究の方法論」(die Methodik des historischen Forschens)・(2)「歴史的に探究し得るものの体系論」(die Systematik des historischen Erforschbaren)・(3)「歴史的に探究されたものの叙述のトポス論」(die Topik der Darlegungen des historisch Erforschten)を包含する⁽²⁴⁾。

まず「緒言」において、ドロイゼンは次のように述べて、みずからの旗幟を鮮明にする。「今日政治であるところのものが、明日は歴史に属する。今日一つの業務（Geschäft）であるところのものが、もしそれが十分重要であつたとすれば、一世代後には歴史の一部分と見なされる。いかにして諸々の業務から歴史が生じるのであるか。（Wie wird aus den Geschäften Geschichte?）。諸々の業務が歴史になることに対する基準はどこにあるのであろうか。」⁽²⁵⁾ また明らかにランケを意識しながら、「資料批判というものは昔日の諸見解を再建することよりも先へと導かれるであらうか。資料批判は『純粹なる事実』へと導かれるであらうか。」⁽²⁶⁾ と述べている。これら二例の引用からも容易にわかるように、ドロイゼンにおいては政治史が重要な意味をもち、しかも彼の歴史の考え方は明らかにランケのそれとは異なっている。

ドロイゼンによれば、歴史とは「変化しつつある現象の休みなき運動」を、存在するものの「前後関係」（das Nacheinander）において、「絶えずなる生成のうちにあるものとして把握」する、われわれ人間精神の働きによっている（§ 1—§ 2）。ドロイゼンはここでアリストテレスの *De Anima*, II. 5. 7 から、*ἐνθόρσις αὐτοῦ*（自己自身への発展）なる用語を引証して、歴史の発展をもって人間の自己の完成態への発展と見なしている。それはともあれ、人間の眼に絶えず進歩するこの「休みなき上昇の総計」が「倫理的世界」（die sittliche Welt）であつて、この世界に対してのみ「歴史」（Geschichte）とい

う表現はその完全な適用を見出すのである (§3)。そしてこの歴史を対象とするのが「歴史の科学」(die Wissenschaft der Geschichte) であるが、彼の定式化に従えば、これは「経験的知覚、経験、および探究 (Iotopia) の成果である」 (§4)⁽²⁷⁾。あらゆる経験的探究は、それが向けられている所与によって規定されるが、「歴史的探究」(die historische Forschung) もその所与の対象によって根本的に規定されている。それでは歴史的探究にとっての所与とは何であるか。ドロイゼンによれば、

§5 … 歴史的探究にとっての所与は諸々の過去 (die Vergangenheiten) ではない。なぜなら、これらのものは過ぎ去ってしまっているからである。そうではなく、歴史的探究にとっての所与は、かつてありかつ起こったものについての想起であろうと、あるいはかつてあったものや、かつて起こったものの遺物であろうと、諸々の過去のうちでいまここになお過ぎ去らぬもの (das...im dem Jetzt und Hier noch Unvergangene) である。⁽²⁸⁾

§6 この現在におけるいずれの点も、成ったところのもの (ein gewordenen) である。それが何であったか、そしてそれがいかにして成ったかは、過ぎ去ってしまっている。しかしその過去性は理念的にそのうちにある。

しかし「それらは」ただ理念的「にあり」、消え失せた特質「としてあり」、潜在せる微光「としてあるに過ぎない」。

探究する眼 (der forschende Blick)、探究の眼 (der Blick der Forschung) は、これらのものを呼

び醒まし、再び生き返らせ、過去の空虚な闇のうちに反照せしめることができる。・・・⁽²⁹⁾

つまり現在を生きる有限的精神は、記憶と希望・意欲をもって、過去と未来を理念的に自己のうちに結合することによって、自己の現在のまわりを照らすのである。かくして人間精神は歴史的世界を所有するに至る。そこからドロイゼンは、次のように宣言する。

§ 7 人間精神と人間の手が作り上げたもの、刻印したもの、触れたもの、すなわち人間の足跡のみが、ふたたびわれわれに輝きを放つ。

刻印し、形作り、秩序づけつつ、あらゆる表出において人間は、みずからの個人的本質の、すなわちみずからの自我の、表現を与える。そのような諸々の表現や印象のうちで、われわれになお何らかの仕方、どこかに存しているところのものが、われわれに話しかけ、われわれに理解できるのである。⁽³⁰⁾

以上のような概括的規定を踏まえて、つぎにわれわれが集中的に論究しようとしている「探究的理解」について語られるわけである。

四

ドロイゼンは「歴史的方法」について、「歴史的探究の方法はその材料の形態学的性格によって規定されている。歴史的方法の本質は探究しつづつ理解すること (forschend zu verstehen) である。」(s. 8) (31)、と述べている。しかし「材料の形態学的性格」とは何であろうか？ また歴史的探究の方法はなぜそれによって規定されているのであろうか？ さらに「探究しつづつ理解する」とはどういうことであろうか？ これらの問いについては、『史学綱要』からは明確な答えが得られないので、われわれは『史学論』におけるより詳しい説明に耳を傾けなければならない。

ドロイゼンによれば、数学的・物理学的方法に立脚する自然科学の場合には、考察対象となっている物質(材料・素材)そのものが重要であって、その個別的な形態には関心がない。ところが歴史学の場合はまったく逆で、歴史学は人間精神が生み出す産物、あるいは織りなす事象に関心を抱いているが、これらはいずれも徹頭徹尾個別的な造形物であって、それぞれに異なった形式・形態を有している。「人間的なものが自己を表現する形式、あるいは人間存在の形態学的エネルギーがそこにおいて特徴づけられる形式は、無数である」が、歴史学はまさにそうした無数の個別的造形物を扱うのであり、つまりは「形態学的な性質をもった材料に関係している」のである。それゆえ、「歴史的方法は材料の形態学的性格によって規定されている」(32)ということになる。敷衍すれば、「歴史的な世界においては、類似性 (Analogien) ではなく、異常性 (Anomalien)こそが推進する力である、と言ってよかる

う。」⁽³³⁾

それでは、このような材料の形態学的性格によって規定されている歴史的探究の方法は、なぜ「探究しつつ理解すること」をその本質とするのであろうか。この点に關するドロイゼンの説明もなかなか興味深いものがある。ドロイゼンは一八五七年の講義では、「歴史的方法の本質は探究しつつ理解すること、つまり解釈である」(das Wesen der geschichtlichen Methode ist forschend zu verstehen, ist die Interpretation)と述べている。まず注目すべきは、この用例でもわかるように、後代の一般的慣行とは異なり、ドロイゼンにおいては historisch と geschichtlich の明確な区別がまだ存在しないことである。つぎに、「探究しつつ理解すること」が「解釈」と同定されていることである。この同定に含蓄されている意義深い内容を理解する上で、これに引き続く以下の言説はきわめて啓発的である。

ここには、目下わたしの同業者たちの間に広まっている方法から、わたしが自分自身を意識的に分離している点がある。彼らはそれをおそらく批判的方法と呼ぶであろうが、これに対してわたしは解・釈ということを前面に据える。「だが」もちろん、われわれの歴史学的研究の実践においては、われわれは同じ歩みをする。⁽³⁴⁾

この言説はその時代の主流をなすランケ史学に対して、明確な距離を置く発言と捉えることができ、それゆえドロイゼン史学の方法論の肯綮に關わっているといえよう。それはともあれ、それではなぜ「解釈」は「探究しつつ理解すること」と等しいのであろうか。

ドロイゼンが言うには、「理解の可能性は、われわれ観察者のうちに、理解されるべきもののなかにその表現を有しているところの、同一の倫理的・知的な範疇が見出される、ということをも前提とする」のであり、そして「同一の範疇がここに表現されている場合に限って、われわれは理解することができ」⁽³⁵⁾のである。動物や植物は、よしんばそれに物体に対応する心魂のようなものがあつたとしても、それはわれわれには近づき得ないので、その形態学的要素はわれわれの学問的理解をすり抜ける。ところが人間や人間的事象に関しては、認識する者と認識されるものとの間に、ある「同等性」(Gleichsein)⁽³⁶⁾が成り立つ。『史学綱要』の第九節が言わんとしているのは、まさにこのことである。

§ 9 理解の可能性は、歴史的材料として与えられる諸表出がわれわれと同質的な性質を有している、という点に存する。

理解の可能性は、人間の感性的・精神的本質があらゆる内的経過を感性的に知覚可能な仕方で表出し、あらゆる表出のうちに内的経過を反映していることによって、制約されている。表出というものは知覚されると、知覚する者の内面に投影されながら、同様の内的経過を惹き起こす。不安の叫び声を聞くと、われわれは叫ぶ人の不安を感じ取る、といったように。(中略)

人間、人間の諸表出、また人間が形成したものに對して、われわれは本質的な同質性と相互性のうち (in wesentlicher Gleichartigkeit und Gegenseitigkeit) にあり、またそうであることを感ずる。

—— 各々の自我は自己自身のうちに閉じ込められつつ、各々の他者に對してその諸表出において、自己自身を開示するからである。⁽³⁷⁾

ここで重要なのは、「同質的な」(kongenial) という用語である。ドロイゼンは『史学論』の別の箇所で、「同質性」(Kongenialität) について、次のように語っている。

思想家や演説家であるためには、研究と修練とが同じだけ必要であるが、しかしひとがみずからに与えることのできないもののみが、すなわちまさにこの種の活動のための天分 (Begabung) が、両方のものを強化し発展させる。そして歴史家の天分は、なかならず現実的なものに對する感覚である。すなわち、現象化する事物のうちに、生き生きとして作用している力を、それによってそれらの事物が存在し生成しているところのものを、その真理を、直観する同質性 (Kongenialität) である。⁽³⁸⁾

これと関連して、われわれにとつてとくに意義深いのは、次の言説である。

これらの諸真理を見出し把握することを理解という。なるほど方法というものは、いかにしてわれわれが探究しつつ理解したり、また理解されたものを詳述したりするかを学ぶ、そのメカニズムを示すことができるであろうが、しかし理解の本来的な作用、つまり現実の諸形式のなかに表現されている精神と、われわれの精神とが共鳴し合う同質的な響きを、方法というものは教えることができるのであろう。

このような作用の奥義は、人間の、そしてより詳しく言えば、それへと召命された人間の、倫理

的・知的な本性に存している。彼は諸々の精神のささやきを聴き取らなければならず、そして認識された現実によって、ある形態の真理が彼の心に触れたときには、直ちに振動して鳴り響く琴線を、魂の奥深くにもっていなければならない。彼はまた、みずからのうちで鳴り響いているものは、真理のなかの真理のかすかなる反響であることを予感しなければならない。⁽³⁹⁾

以上の引用からわかることは、ドロイゼンのいう「理解」は、最も一般的には、人間精神の内面的表出を「それらのうちで表現しようと意図されたことへと引き戻すこと」⁽⁴⁰⁾であるが、なかなか同質的な存在者間に成り立つ共感的な理解を意味している。それではなぜ「探究的」という名辞がそれに付け加えられるのであろうか。この点を明らかにするためには、ドロイゼンにとって *forschen* / *Forschung* といった言葉がそもそもいかなる意味を有していたかを、あらためて再検討する必要がある⁽⁴¹⁾。

五

「歴史家」(Historiker)を表示する際に、ランケの場合には *Geschichtsschreiber* という用語が圧倒的に多く用いられるが⁽⁴²⁾、ドロイゼンの場合にしばしば *Forscher* という用語が充てられている。例えば、ここに引用する事例がそうである。

ランケやニールブルやすべての類似の研究者たち、彼らがそのようなにして探究しつつ獲得し詳述

したことを、もちろんひとは本来的な意味では第一次資料ないし原資料とは呼ばないが、しかしましてや派生的資料とは呼ばない。彼らは第一次的な直接的把握を提供しているわけではないが、しかし彼らが提供する把握は、非常に確実な方法的方策によって獲得されているので、多くの点で第一次資料よりも高い価値をもっている。⁽⁴³⁾

ここに見られるように、歴史家はとりわけ《研究者》(Forscher)であり、彼らの活動は過去の事実・真相・真理を「探究しつつ獲得し詳述すること」(forschend zu gewinnen und darzulegen)に存している。W・ハルトウィックによれば、「徹底的に粘り強く探し求める」(gründlich, beharrlich suchen)というのが、forschenという語の原義だそうだが、ドロイゼンの語法には本来の意味がまだよくとどめられているという⁽⁴⁴⁾。実際、ドロイゼンにとって歴史学は、「歴史として伝承されていることを単に反復すればよいのではなく」、むしろ「より深く突き進まなければならない」。それは「いやしくも過去からふたたび見つけ出されるべきものを、およそ可能なかぎり、精神においてふたたび生き生きと甦らせ、それを理解しようとする」⁽⁴⁵⁾ことである。なるほど、史料批判を通して過去の客観的事実を突き止めるようにすることは、学問的には重要なことである。しかし「客観的事実などというものは、われわれの研究の現実においてはまったく存在しない」⁽⁴⁶⁾。かくして史料批判とは異なる解釈という課題がここに成立する。

ところで、ここに引証した「より深く突き進む」(tiefer dringen)という表現と酷似の表現を、ドロイゼンは『史学綱要』の緒言の末尾でも用いている。それはヴェルヘルム・フォン・フンボルトの哲学

的思想にひとしきり触れた後、「このような思想からしてわれわれの学問の問題により深く突き進み、その方法と諸課題とを基礎づけ、かつその認識された本性からその形態を全般的に展開することが、可能であるとわたしには思われた」⁽⁴⁷⁾と述べているくだりである。ここでは *tiefer einzudringen* となっているが、『史学論』における *tiefer dringen* との対応は明白である。こういうことから考えても、ドロイゼンの探究ないし研究の概念に対して、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの影響を読み取ることができる、あながち牽強附会なことではないであろう。ドロイゼンが「歴史的諸科学にとつてのベーコンのような人」(*ein Bacon für die Geschichtswissenschaften*)⁽⁴⁸⁾として賞讃するフンボルトは、周知のように、学問研究の理想を無限の真理探究として捉えた。例えば、以下に引用する三つの言述は彼の学問理想を直截に表現している。

さらにいうと、学校というものは出来上がった既成の知識にのみ関係しており、またそれを学ぶところであるのに対して、高等の学問的施設の特色は、学問をつねにいまだ完全に解決されていない問題として扱い、それゆえつねに研究のうちにとどまることである。⁽⁴⁹⁾

一つの目標を達成しようと努めること、そして物理的ならびに道徳的な力をつぎ込んで、この目標を戦い取ること、このことに壮健で力に溢れた人間の幸福は基づいている。張り詰めた力を平静に引き渡す所有は、ひとを欺く幻想においてのみ心をそるものである。⁽⁵⁰⁾

学問的要求というものは、その現れは種々様々であるが、もしひとがこれを単純な本質に還元すれば、つねに、見えるもののなかに見えないものを認識することである。それを超えては何も考えられない。しかし——少なくとも学問にとっては——いかなる静止も存在しない。そしてこのことが学問の真の本質をなすことは、次の事実によって最もよく示される。すなわち、ただこの見地からのみ学問に連関をもたらし、また学問はこの見地に立つてのみ内部から発する絶えざる拡張を行なうことができるという事実である。またこうしてのみ、学問は人間の要求に応じるのである。人間にとって学問も究極目標ではないが、しかし究極のものや最高のものに達する段階ではある。⁽⁵¹⁾

ドロイゼンのいう「探究的理解」、つまり *forschend zu verstehen* の背景には、このようなフンボルト的な学問研究の理想⁽⁵²⁾ が潜んでいると見てほぼ差し支えないであろう。そこでいったん協道に逸れて、フンボルトの史学思想について一瞥してみたい。但し、あくまでドロイゼンと関係すると思われる範囲に限定しての話である。

六

フンボルトの諸著作のなかで、ドロイゼンの史学思想に最も直接的に大きな影響を与えたと思われるのは、「歴史家の課題について」(*Ueber die Aufgabe des Geschichtsschreibers*) という一八二一年の論文(もともとベルリン・アカデミーでなされた講義)である⁽⁵³⁾。このなかでフンボルトは、「歴史家

の課題は出来事の叙述である」⁽⁵⁴⁾と明言する。しかし歴史家が出来事を叙述して真理に達するためには、現実の出来事を批判的に検証することと、ばらばらな事実を想像力ないし構想力を用いて一つの全体へとつくりあげることが必要である。歴史的真理に近づくためには、同時に二つの道をとって進まなければならない。一つは「出来事を正確に、党派に偏さずに、かつ批判的に究明する道」であり、もう一つは「かくして探究されたものを結合し、あの手段〔＝批判的方法〕によっては到達しがたいものを予感する道」⁽⁵⁵⁾である。第一の方法のみでは歴史的真理の本質を誤るであろうし、第二の方法のためにこちらを蔑ろにすると、個々の点で真理を偽造しかねない。部分部分の列挙や叙述だけでは不十分で、全体の上に澆刺たる息吹が通う必要があるのである。「精神は、すべての生起しつつある事柄の形式を自分のものとすることによってのみ、実際に探究し得る素材をよりよく理解し、単なる悟性の操作がなし得る以上のものをこの素材のなかに認識することを学ぶべきである」。いずれにせよ、すべてのことは「探究する力と探究されるべき対象とのこの同化」(diese Assimilation der forschender Kraft und des zu erforschenden Gegenstandes)⁽⁵⁶⁾に懸かっている。

歴史が人間に役立つのは、それが「現実に対する勘」(der Sinn für die Wirklichkeit)⁽⁵⁷⁾を喚起し、「現実の取り扱いに対する勘」(der Sinn für die Behandlung der Wirklichkeit)⁽⁵⁸⁾を鼓舞し純化するからである。しかしそのためには、歴史家は世界史をそのあらゆる部分にわたって完全に支配している理念を見出さなければならない。ところで、「理念というものは精神的個性的な力にしかみずからを打ち明けることができない」⁽⁵⁹⁾。裏返して言えば、「各々の人間的個性は、現象のうちに根を下ろしている理念である。そして若干の個性からこの理念は燦然と輝き出るので、理念がそのなかでみずからを顕現するた

めに、個人という形式をとったとしか思われないほどである」⁽⁶⁰⁾。このような理念を剔抉しようと努める歴史家にとっては、「一切の歴史は一つの理念の実現にすぎず、理念のうちに同時に力と目標とが横たわっているのである」⁽⁶¹⁾。かくしてフンボルトは、歴史家の究極の仕事は、「現実のなかに存在を得ようとする理念の努力を叙述すること」(Darstellung des Strebens einer Idee, Daseyn in der Wirklichkeit zu gewinnen)⁽⁶²⁾であると述べる。

以上がフンボルトの論文の骨子であるが、ここに前面に押し出されているのは、「史的理念説」(historische Ideenlehre)といわれる学説である⁽⁶³⁾。これまでのわれわれの考察からして、ドロイゼンの史学思想の背景にあるのもこれにかなり近いものと考えてほぼ間違いないだろう。フンボルトのこの論文が「歴史主義の綱領書」(Programmschrift des Historismus)⁽⁶⁴⁾と呼ばれるものであることを考えると、フンボルトとドロイゼンの親近性はわれわれの考察にとってきわめて興味深い。しかしこの点については、最後に触れることにして、われわれはもう一度ドロイゼンの『史学綱要』に立ち戻って、つぎに「探究的理解」が具体的にいかにして成立するかを見てみよう。

七

われわれがすでに見たように、ドロイゼンは理解の可能性を認識(解釈)主体と認識(解釈)対象との間の「同質性と相互性」とのうちに見出すが(§9)、彼はそれに引き続いて次のように述べる。

§ 10 個々の表出は、内面の一つの表出として、この内面を逆推論するという仕方では理解される。このような内面はこの表出の事例においては、一つの中心的な力として理解される。その力は、それ自身においては同一のものであり、あらゆる周辺的な作用や表出においてと同様、こうした表出においても現れる。

個々のものは全体において理解され、また全体は個々のものから理解される。

理解する者は、彼が理解しなければならぬものと同じく、一つの自我であり、それ自身一つの総体であるがゆえに、その総体性を個々の表出から、かつ個々の表出をその総体から補完する。

理解は総合的であると同時に分析的であり、帰納であると同時に演繹である。⁽⁶⁵⁾

このように、ここでは理解する側と理解される側の同質性と同時に、個と全体との間のいわゆる「解的循環」について語られ、総合的判断と分析的判断、帰納と演繹が相互に補完し合って、一つの理解が成立することが語られている⁽⁶⁶⁾。しかし理解はそのようなプロセスによって漸進的に深まるものとは限らない。否、むしろドロイゼンはそれとは正反対の、突如として生起する、いわば電撃的な理解について語っている。

§ 11 理解 (Verstehen) の論理的メカニズムから理解 (Verständnis) の作用は区別される。理解の作用は、既述の諸条件のもとで、あたかも魂が魂のなかに沈潜するときのように、直接的直観 (unmittelbare Intuition) として、交接における受胎のように、創造的に生じる。⁽⁶⁷⁾

一八五七／五八年の手書きの草稿には、次のように記されている。

§ 8 ……理解というのは、概念、判断、推論を別々に展開したり、それらを統合したりすることではない。そうではなく、それは接近する起電盤の間に発する閃光のごとく、交接における受胎のごとく、創造的な作用である。⁽⁶⁸⁾

一八六八年の第一版では、この部分は次のように微妙に改訂されている。

§ 11 理解の論理的メカニズムから理・解・の・作用は区別される。理解の作用は、既述の諸条件のもとで、直接的直観として、接近する起電盤の間に発する閃光のごとく、交接における受胎のごとく、創造的作用として生じる。⁽⁶⁹⁾

また、ヒュプナー編集の『史学論』においては、より詳しく次のように語られている。

理解は、われわれにとって人間的な仕方では可能な、最も完全な認識である。それゆえ理解は、そこで働く論理的メカニズムが意識されることなく、直接的かつ突発的に行なわれる。それゆえ理解の作用は、直接的直観のような、創造的作用のような、さながら二つの起電盤の間に発する閃光のような、受胎の作用のようなものである。理解においては、人間の精神的―感性的本性の全体が完

全に協働し、与えると同時に受け取り、つくると同時に身ごもる。理解は人間の本質が最も人間的なかたちで表われる行為であり、真に人間的な振る舞いはすべて、理解のうちで安らぎ、理解を求め、理解を見出す。理解は人間とあらゆる人倫的存在の基礎とをつなぐ最も緊密な絆である。⁽⁷⁾

ここに「突発的に」と訳出した plötzlich というドイツ語が端的に示しているように、理解は思いがけない仕方、突如として生じる。しかも何かの媒介を通じてというよりは、むしろ「直接的」(unmittelbar) に生起する。それは「閃光」(Lichtfunken) が示唆するように、衝撃的な電撃的であり、また「受胎」(Empfangnis) が示唆するように、まさに創造的なプロセスである。ここに示されているのが、ドロイゼンの意味での「理解」の極致であることは間違いないだろう。ともあれ、このようにして「理解」をめぐるドロイゼンの議論は、つぎに人倫的世界の思想へと導かれる。

八

ドロイゼンはまず「序論」の § 12―§ 15 において、その後「体系論」の § 45―§ 49、§ 72―§ 86 などでも、「人倫的世界」について語っている。ここではそのなかの幾つかを列挙することで、ドロイゼンの倫理思想の特質を浮き彫りにしてみたい。

§ 12 人間は他者を理解することによって、また他者に理解されることによって、すなわち人倫

的共同体（家族、民族、国家、宗教等々）のうちではじめて、その素質にしたがつてあるところのもの、すなわちそれ自身における総体となる。

個人はただ相対的にのみ総体となる。理解しつつ、また理解されつつ、個人は彼がその肢体であり、かつその本質と生成とに関与するところの、諸共同体の一つの範例にして表現のようなものすぎない……。⁽⁷¹⁾

§ 14 人間の思惟の対象ならびに性質に従って、（哲学的ないしは神学的）思弁的方法、物理的方法、歴史的方法という三つの可能なる学問の方法がある。

これらの方法の本質は、認識すること、説明すること、理解することである。

それゆえ、論理学、物理学、倫理学という古代の学問の法規は、一つの目的への三つの道ではなくて、むしろ人間の眼がその輝きに耐え得ぬような永遠の光を、色彩反射において推察しようと欲する場合の一つのプリズムの三つの面なのである。⁽⁷²⁾

§ 15 倫理的世界は絶えず多くの目的によって、そして最後には目的的目的によって動かされていて、休みなく成長しつつ、かつ自己のうちに自己を高めつつある世界であると、われわれは予感しまた信じるものである……。

§ 19 歴史学研究は、われわれの自我の内容もまた、媒介されたもの、生成したもの、歴史的な

帰結であるという反省を前提とする（第十二節）。認識された媒介という事実が想起（*ἀνάμνησις*）である……。(73)

§ 45 歴史学の方法論の領域は、人・倫・的・世・界・と・い・う・宇・宙・（*der Kosmos der sittlichen Welt*）である……。(74)

§ 48 諸個人のなかで構築、形成しながら、またその作品のなかで生成しながら、人類は人倫的世界という宇宙を創造する……。(75)

§ 72 有機的自然においてあらゆるものが細胞から形成されるように、人倫的世界におけるすべての形成と変化は、意志行為を通じて生じる。国家、民族、教会、芸術等がこれこれしかじかのことを行なうと言われる場合にも、それは意志行為を通じてである。(76)

§ 75 歴史的運動に脈打つ生の鼓動とは自由である……。(77)

以上の引用からだけでも、ドロイゼンがカントやフィヒテ、ヘーゲルやフンボルトなどと通底する、ドイツ・イデアリスムスに深く棹さしていることが、容易に読み取れる。(78)。個人は人倫的共同体のなかに生み落とされ、そのなかでみずからの自由と意志を行使しながら自己を形成し、やがて人倫性を身

につけた人格へと成長する。人倫的世界はこうして人間を介して生成と成長を遂げていくのであるが、このプロセスを時間的継起において考察したものが、人間にとっての歴史にほかならない。ドロイゼンによれば、「歴史の理解、すなわち歴史が理解されることと歴史が理解することとは、このような生成と生長において、一步進むごとに広まりかつ深まる。歴史についての知識は歴史そのものである。歴史はたえず先に進みながら、その研究を深め、その視界を広くしなければならぬ」。かくしてそこから、「歴史的事物はその真理を人倫的勢力のうちに有している。歴史的事物は人倫的勢力のその時々の実現である」⁽⁷⁹⁾、と宣言されるのである。

ここに明確に示されているように、歴史学と倫理学は相互に密接に関わり合うことになる⁽⁸⁰⁾。両者の関係に関しては、§ 82でより踏み込んで次のように語られる。「倫理学と歴史学はいわば同格のものである。なぜなら、歴史は《純粹理性》には見つけることができずにとどまっていたところの、《実践理性の要請》の起源を与えるからである」⁽⁸¹⁾。ここで「同格のもの」と訳したのは、Kordinatenという語であるが、その意味を究明するためには、より深い考察が必要である。また「いわば」(gleichsam)という副詞にも注意を払う必要もある。しかし目下それを行なう準備ができていないので、遺憾ながらこの点の解明は他日に譲らなければならない。いずれにしてもドロイゼンにとって、歴史とは「永遠なるものおよび神的なるものに関与するために」(τὴν αὐτοῦ ἀεί καὶ τοῦ θεοῦ μετέχουσαν) があるのであって、「歴史とは人類が自己自身について意識することになることであり、また意識していることである」⁽⁸²⁾。

九

われわれはこれまで、『史学綱要』の最終稿(第三版)を主要資料とし、しかも極力それに即しながら、ドロイゼンの史学思想の特質を叙述してきた。最後にわれわれは、「歴史主義と解釈学」というテーマに関して、ドロイゼンの「探究的理解」に含蓄されている意味・内容を明らかにしてみたい。

アネッテ・ヴィットカウによれば、歴史主義の問題史の発端は「人間とその文化が歴史的に成ったものであること」についての発見と、「人文科学における歴史学的認識方法の確立」であるという。この二つの現象は「十八世紀末以降、とりわけ十九世紀において遂行された、西洋的思維の歴史化という同一の包括的な精神的現象の異なったアスペクト」⁽⁸³⁾であって、相互に関連しているのであるが、とくにこの両面において顕著な貢献を成し遂げたのが、ほかならぬドロイゼンである。彼の重要な歴史学的創見は、歴史への関心が人間存在そのものの歴史性に基づくという見解である。人間文化が歴史的発展の所産であるだけでなく、人間の生そのものが「歴史的に成ったもの」(die geschichtliche Gewordenheit) だというのである。人間は認識者として歴史に対向しているだけでなく、人間自身の生が歴史と織り合わされているのである。ドロイゼンはこのことを、次のように表現している。

人間の誕生の瞬間から、否、受胎の瞬間から、測り知れない諸要因が……〔人間に〕作用し、
いまだ無意識のうちに人間は両親のさまざまな影響を受け、両親の身体的ならびに精神的な性向な

どを受けつぐ……。人間は固有の民族、固有の言語、固有の宗教、固有の国家といったあらゆる歴史的所与のなかに生まれ落ちる。そしてそのようにしてあらかじめ見いだされたものを、……みずから知ることなしに、自分自身のうちに受け入れ、内面化することによって、かくすることによってはじめて、動物的生以上のものを、つまり人間的な生を手に入れるのである。⁽⁸⁴⁾

われわれがすでに§6で見たように、現在は過去から「生成した現在」(die gewordene Gegenwart)であって、過ぎ去った過去は理念として、余韻として、あるいは微光として、いまなお現在のなかに潜んでいる。歴史を探究する研究者の探究眼がそれを呼び醒まし、再び生き返らせ、あらたな活力を注入する。歴史は人間にとって本質的な構成要素である。人間は歴史のなかにあり、また歴史は人間のなかにある。人間性は歴史によって陶冶されるので、それは「生成しつつある人間性」(die werdende humanitas)⁽⁸⁵⁾と呼ばれるのがふさわしい。このように、人間の生の根本的歴史性を捉えたところが、ドロイゼンのすぐれた功績の一つである。

歴史主義の誕生にあずかる第二の契機、すなわち歴史学的認識方法の確立に関しては、これまでの考察からして贅言を要するには及ばない。ドロイゼンの『史学論』⁽⁸⁶⁾は、まさに「歴史の知識学」(die Wissenschaftslehre der Geschichte)として、今日に至るまで名声を誇つてきている。イエレン・リューゼンが言うように、そこにおいて「歴史学が固有の対象領域と固有の方法をもった学科として、その専門的な位置を基礎づけ正当化する、自己反省の発展が完成される」⁽⁸⁷⁾ことは、疑問の余地がない。

「歴史主義」という概念は多義性を内包しているが⁽⁸⁸⁾、もしわれわれがこれをトレルチとともに「人

間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化⁽⁸⁹⁾」という意味に解するならば、この意味においてもドロイゼンはまさに歴史主義者の典型である。彼の思惟は徹底的に歴史化されており、すべての事象を歴史的な生成と発展の相において捉えている。「《休みない》(Rastlos)は彼の講義のお気に入りの言葉であった」⁽⁹⁰⁾とかつての学生マイネッケが述懐しているように、彼の『史学論』には rastlos という言葉が頻出する。したがって、われわれはドロイゼンのなかに醇乎たる歴史主義の表明を見ることができるといえる。

このように、ドロイゼンにおける歴史主義の特性はきわめて顕著であるが、そのことは近代史学の創設者ランケと比較したときに、より一層明瞭なものとなる。すなわち、ランケが「事実本来どうであったのか」(wie es eigentlich gewesen)を示すことを歴史学の本務と見なし、厳格な史料批判の手続きを通して、「ありのままの真実」を獲得しようと努めたのに対して⁽⁹¹⁾、ドロイゼンにとって「客観的な不偏不党 (die objective Unparteilichkeit) は、・・・非人間的なことである。人間的とはむしろ党派的事であることである」⁽⁹²⁾。彼は「わたしの祖国、わたしの政治的確信、わたしの宗教的確信、わたしの真摯な研究がわたしに達成することを許してくれたような、わたしの立場が有する相対的な真理」の立場が、いかなる立場にもコミットせず、不毛な一般性しか達成しない、「宦官的な客観性」(eunuchische Objektivität)よりも好ましいと考える。ドロイゼンによれば、たとい自分の立場がどんなに一面的で限られたものであろうとも、「ひとはこの限定されたあり方を告白する勇氣をもたねばならない。そして限定された特殊なものの方が、普遍的なものや最高度に普遍的なものよりも豊かでまざっていると考えて、みずからを慰めなければならない」⁽⁹³⁾のである。

ドロイゼンは、師のアウグスト・ベークに倣って、現在のわれわれにまで伝わる歴史伝承を解釈することを通して、そのなかに保存されている過去の精神を再構成することを、歴史学の重要な課題と見なす。古典文献学者のベークは、「人間精神によって生み出されたもの、すなわち、認識されたものを認識すること」(das Erkennen des von menschlichen Geist Productirten, d. h. des Erkannten)⁽⁹⁴⁾をもって、文献学の本来の任務と見なしたが、彼はこのような「認識されたものの認識」(Erkenntnis des Erkannten)を、術語的には、「理解」(Verstehen)として言い表した。そこから「認識されたものの再認識」という解釈学的モデルが生じたのであるが、ドロイゼンは師の精神を継承しつつ、その解釈学的モデルを歴史学全体の基礎に据えようとしたのである。われわれが先に見たように、ドロイゼンが目指す歴史学は、「歴史として伝承されているものを反復しなければならぬだけでなく、より深く突き進まなければならない。それは、いやくも過去からふたたび見つけ出されるべきものを、およそ可能なかぎり、精神においてふたたび生き生きと甦らせ、それを理解しようとする」⁽⁹⁵⁾。このような理解の努力こそ、実は「探究的理解」と呼ばれているものにほかならない。

「探究的理解」(forschendes Verstehen)という表現は、「探究しつつ理解すること」(forschend zu verstehen)という言い回しから派生したものであるが、この場合の「探究的」(forschend)という言葉にいかなる意味が込められているかは、つぎの引用から明らかになる。

そこから二つのことがとくに明瞭に浮かび上がってくる。一つは、われわれは自然科学のように実験という手段をもっているわけではないということ、つまりわれわれは探究することができるだけ

であり、また探究すること以外は何一つできないということである。つぎに、最も徹底的な探究といえども過去の断片的な仮象しか得ることができないということ、また歴史と歴史についてのわれわれの知識とでは、天と地ほどの違いがあるということである。⁽⁹⁶⁾

つまり、「探究的」という言葉には、フンボルトの「不断の研究」に、さらにはあの Lessingwort にまで遡る、真理探究（探求）の理想が込められている。究極的な真理には到達しないが、それを目指して無限に繰り返される探究（探求）の努力が、それによって言い表されている。現在到達されたものはあくまでも暫定的な成果であり、だからこそ新たな、より深い理解を目指しての試みが不断になされなければならぬのである。「有限なる眼には端緒と終末は蔽われている。しかしそれは流れる運動の方向を探究しながら認識することができる」⁽⁹⁷⁾という言葉にも、このような「探究的理解」の精神が垣間見られる。

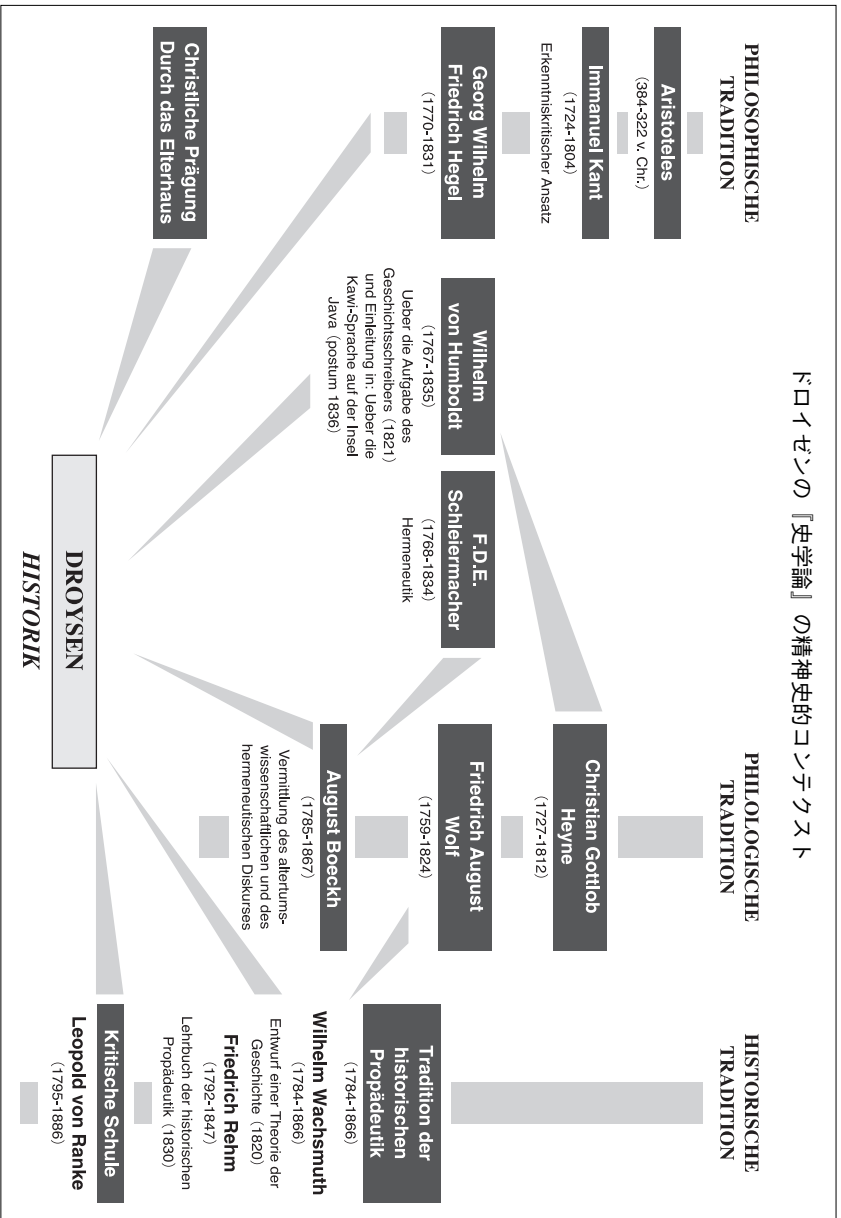
十

以上、われわれはドロイゼンの「探究的理解」をめぐって、可能な限り原典資料に即してその内実を明らかにすべく努力してきた。われわれの考察からも明らかのように、ドロイゼンの『史学論』にはさまざまな思想や精神的潮流が流れ込んでおり、それを十全な仕方で理解するためには、それぞれの要素をその源泉にまで立ち返って検証する作業が不可欠となる。クリスティアン・ハッケルによれば、

『史学論』に対して最も大きな影響を与えているのは、図「ドロイゼンの『史学論』の精神的コンテクスト」に図解されているように、①哲学的伝統、②文献学的伝統、③歴史学的伝統の三つと、それらに加えて、生家によって刻印されたキリスト教的精神性であるが、より直接的にはヘーゲルの思弁的歴史哲学、ベークの文献学と解釈学、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの史的理念説、そしてランケの批判的歴史学であるといつてよい。各々の伝統ならびにその代表的思想家たちとの関係については、ある程度のことはすでに述べたが、それ以上のこととなるとより掘り下げた研究が必要であり、それはわれわれの今後の重要な課題である。

ところで、われわれは『史学論』ならびに『史学綱要』を主要なテキストとして、ドロイゼンの「探究的理解」の内実を説明しようとしてきたのであるが、最後に問わなければならないのは、彼の歴史理論が内包している政治性の問題についてである。「プロイセン・小ドイツ学派の創始者」という呼称に端的に示されているように、彼はプロイセン国家への忠誠を公然と表明したのみならず、歴史家としてその歴史的使命を正当化する作業に挺身した。実際、われわれが一で概観したように、ドロイゼンは現実の政治に深くコミットした歴史家であり、彼の歴史叙述——『陸軍元帥ヨルク・フォン・ヴァルテンブルク伯爵の生涯』『プロイセン政治の歴史』など——はプロイセン主導のドイツ国民国家の統一を擁護する立場で執筆されている。マイネッケの言を引くまでもなく、「学問と政治との共生」⁽⁹⁸⁾は歴史家ドロイゼンの根本特徴であり、政治色濃厚な彼の歴史叙述に対して絶えず浴びせかけられてきた非難も、かかる共生に根本原因を有している。しかし政治史家としての彼の実践がそのようなものであったとすれば、そのことは『史学論』で展開されている彼の歴史理論といかなる関係に立っているのである

ドロイゼンの『史学論』の精神的コンテクスト



出典：Christian Hackel (Hrsg.), *Philologe-Historiker-Politiker Johann Gustav Droysen 1808-1884* (Berlin：G+H Verlag, 2008), 61.

うか？換言すれば、理論的著作としての『史学論』は、政治史家の実践との相関関係において捉えられるべきであろうか、それともそれと切り離して捉えられるべきであろうか？この問いに対して正確な答えを与えることは、現段階ではかなり困難である。なるほど多くの批評家たちは、ドロイゼンが歴史認識の指導的理念のなかに政治的目標設定を忍び込ませることによって、学問的な歴史認識を歪めてしまったと非難してきた。プロイセンの権力政治を是認する彼の歴史叙述からすれば、このような非難もそれなりの根拠を有しているといえようが、しかしそれが事実だったとすれば今日ますます高まる『史学論』の名声は説明がつかない。われわれが見るところでは、ここにはエートスとクラトスという問題性が潜んでいる。ドイツ観念論の流れを汲むドロイゼンは、国家権力が高度の倫理性を帯びるべきことを当然視しているが、現実の政治過程は彼の理想主義的期待を裏切らざるを得なかった。そこに理論と現実の由々しき乖離が生じたことは否定できないが、国民国家の形成のなかで市民の自由という理想を實現しようとした彼の意図は、それはそれとして承認すべきではなからうか。「もし、ドロイゼンが歴史学に与える政治的性格が、プロイセン主導のもとでのドイツ国民国家の形成に対する彼の賛同ということにのみ還元されるなら、彼が解放と伝統との間を媒介するという課題によって、歴史学に与えたこの政治的性格は、誤解されることになるであろう」⁽⁹⁹⁾、とイエレン・リューゼンは述べているが、ドロイゼンの意図に従えば、市民的自由の實現はドイツ国民国家という枠を超えて、人類全体にまで及ぶ射程を有している。歴史的認識が、認識する主体の現在と過去を媒介することによって、自由化の過程としての歴史の統一性を追求するものであるとすれば、歴史学は自由の原理を時代の意識へと高め、それによって歴史的自己理解の地平を時代に対して切り開かなければならないのである。ランケ的な客観的歴

史認識や歴史的事実の批判的確定に甘んずることのできなかつたドロイゼンの歴史理論の政治性は、畢竟、個人のみならず市民、ひいては人類をも政治的行為の主体へと教化するという崇高な人倫的目標を、歴史学に負わせたところに由来していると思われる。ヘイドン・ホワイトがドロイゼンの『史学論』を「ブルジョア的科学」(a Bourgeois Science)として規定するとき、彼は誤解を招きやすいこの表現によって、おそらくこの事態を指し示している⁽¹⁰⁾。かかる表記の是非は別途に検証されなければならないが、いずれにせよ、ドロイゼンが『史学論』で展開した歴史理論は、間違いなく彼の歴史的ならびに政治的著作を貫通している。そうであるとすれば、彼の歴史理論は実際の政治史叙述からひとまず切り離して、それ自体としてまず検証されなければならないとしても、同時に、前者は後者との相關関係においても把握される必要があり、その意味では本稿の考察ははまだその対象の半面しか照射し得ていないことになる。しかし研究の緒について日の浅い筆者にとって、その課題は現段階では明らかに手に余るものであることを、正直に告白せざるを得ない。

むすびに

最後に、ドロイゼンの「探究的理解」について敷衍すれば、ガダマーはそれが畢竟「良心の探究」(Gewissensforschung)の概念に行き着くことを示唆している⁽¹¹⁾。しかしそこまで追跡することもわれわれの能力を超えているし、目下のわれわれの関心でもない。とはいえ、史学思想をめぐるドロイゼンの議論が、自由と人格にまつわる究めがたい秘密の領域に関わっており、単なる歴史学の枠内には収ま

りきらない形而上学的次元をも含んでいることはたしかである。歴史主義の問題も解釈学の問題も、いずれも人間存在の究極的次元の問題に逢着せざるを得ないが、ドロイゼンの『史学論』は、この両方の問題を考える上で、きわめて貴重な材料を提供している。より十全なる解明は他日に期すこととして、いまのわれわれとしては、その事実を確認したことによしとしなければならないであろう。

(やすかた としまさ・北海学園大学教授)

*本稿は、平成21―23年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C)(一般))を交付されて行なっている研究「解釈学と歴史主義——A・ベークとJ・G・ドロイゼンについての事例研究——」の成果の一部である。

(1) ドロイゼンのこの講義は、ベルリン大学の恩師アウグスト・ベークが、一八〇九年から一八六五にかけて(一八〇九年はハイデルベルクで、一八一一年以後はベルリンで)合計二十六学期にわたって行ない、かつてドロイゼン自身も受講したことのある、「文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論」に関する講義に倣ったものであると言われている(August Boeckh, *Enzyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck, zweite Auflage besorgt von Rudolf Klusmann (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1886) を参照のこと)。

ベークの講義とドロイゼンのそれとの比較については、Christiane Hackel, *Die Bedeutung August Boeckhs für den Geschichtstheoretiker Johann Gustav Droysen. Die Enzyklopädie-Vorlesungen im Vergleich* (Würzburg: Königshausen & Neumann, 2006) が詳細な研究を行なっている。

(2) Cf. Christiane Hackel (Hrsg.), *Philolog-Historiker-Politiker Johann Gustav Droysen 1808-1884* (Berlin: G+H

- Verlag, 2008), 57, 121–126; Horst Wälder Blanke, „Johann Gustav Droysens *Historik*. Ein Etappenpunkt in der Geschichte der geschichtswissenschaftlichen Selbstreflexion,“ in ders. (Hrsg.), *Historie und Historie. 200 Jahre Johann Gustav Droysen*. Festschrift für Jörn Rüsen zum 70. Geburtstag (Köln, Weimar, & Wien: Böhlau Verlag, 2009), 27–37.
- (c) Johann Gustav Droysen, *Grundriss der Historik* (Leipzig: Verlag von Veit & Comp., 1868). この小著はわが国では榊俊雄氏によつて的確な日本語に翻訳され、『史學綱要』(刀江書院 昭和12年)として世に送り出されたが、今日では入手がかなり困難な部類に属している。
- (4) Johann Gustav Droysen, *Historik. Vorlesungen über Encyclopädie und Methodologie der Geschichte*, herausgegeben von Rudolf Hübner (München: R. Oldenbourg, 1937; Nachdruck, 5. Aufl., 1967) (以下『Vorlesungen』と略記)。
- (5) Johann Gustav Droysen, *Historik* (Historisch-kritische Ausgabe von Peter Leyh und Horst Wälder Blanke), Band 1 : *Rekonstruktion der ersten vollständigen Fassung der Vorlesungen* (1857); *Grundriß der Historik in der ersten handschriftlichen* (1857/58) *und in der letzten gedruckten Fassung* (1882) (Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Frommann Verlag Günther Holzboog GmbH & Co., 1977); Band 2, *Texte im Umkreis der Historik* unter Berücksichtigung der Vorarbeiten von Peter Leyh nach den Erstdruckten und Handschriften herausgegeben von Horst Wälder Blanke (Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Frommann Verlag Günther Holzboog GmbH & Co., 2007); *Supplement: Droysen-Bibliographie* herausgegeben von Horst Wälder Blanke (Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Frommann Verlag Günther Holzboog GmbH & Co., 2008) (以下『Historik (Peter Leyh)』と略記)。
- (6) Blanke, „Johann Gustav Droysens *Historik*,“ 30.
- (7) 具体的には、一八二六年の夏学期と Demosthenes Rede von der Krone と Geschichte der griechischen Literatur と Encyclopädie der philologischen Wissenschaften 等、一八二七～二七年冬学期と Tacitus Historien と Metrik 等、さつじ一八二七～二八年冬学期と Griechische Alterthümer 等を講じた。 Cf. Christiane Hackel (Hrsg.), *Philologe – Historiker – Politiker Johann Gustav Droysen 1808–1884* (Berlin: G+H Verlag, 2008), 21.
- (8) 具体的には、一八二七年の夏学期と Logik und Metaphysik と Philosophie der Religion を、一八二七～二八年の冬学期と Geschichte der Philosophie と Philosophie des Geistes を、一八二八～二九年の冬学期に Aesthetik と

- Philosophie der Geschichte を發刊してゐる。 Cf. Christiane Hackel (Hrsg.), *Philologe-Historiker-Politiker Johann Gustav Droysen 1808-1884*, 21; Günther Nicolin (Hrsg.), *Hegel in Berichten seiner Zeitgenossen* (Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1970), 490.
- (9) Droysen an Ludwig Moser, Berlin, 10.-29. November, 1831, in *Johann Gustav Droysen Briefwechsel*, herausgegeben von Rudolf Hübner, *Erster Band 1829-1852* (Nachdruck der Ausgabe 1929, Osnabrück: Biblio-Verlag, 1967), 44.
- (10) 二人の間の友情は、例えば両者の間で交わされた手紙のやりとりによつて、確認するに足るであらう。 Cf. Carl Wehmer (Hrsg.), *Ein Tief Gegründet Herz. Der Briefwechsel Felix Mendelssohn-Bartholdys mit Johann Gustav Droysen* (Heidelberg: Lambert Schneider, 1959) .
- (11) Johann Gustav Droysen, *Geschichte des Hellenismus*, 3 Bde., herausgegeben von Erich Bayer, eingeleitet von Hans-Joachim Gehrke (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2008) .
- (12) 但し、古典文献学の分野でドロイゼンが行なった仕事の一部は、必ずしもベークのお眼鏡にかなわなかったようであり、一八四一年にフリードリヒ・ゴットリープ・ヴェルカーに宛てた書簡において、彼は次のように述べている。「彼〔ドロイゼン〕が事柄を取り扱うやり方は、その軽率な方法ゆえに幾分わたしを不機嫌にする・・・」。Max Hoffmann, *August Böckh. Lebensbeschreibung und Auswahl aus seinem wissenschaftlichen Briefwechsel* (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1901), 189.
- (13) Otto Hintze, „Johann Gustav Droysen,“ in: ders., *Soziologie und Geschichte. Gesammelte Abhandlungen zur Soziologie, Politik und Theorie der Geschichte*, herausgegeben und eingeleitet von Gerhard Oestreich, 2., erweiterte Aufl. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1964), 453.
- (14) Johann Gustav Droysen, *Politische Schriften*, herausgegeben von Felix Gilbert (München & Berlin: Verlag von R. Oldenbourg, 1933), 227-229.
- (15) Heinrich Ritter von Srbik, *Geist und Geschichte vom deutschen Humanismus bis zur Gegenwart*, Bd. 1 (München & Salzburg: Bruckmann und Otto Müller Verlag, 1950), 367.
- (16) H.-W. Heidinger, “Historik,” in *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, herausgegeben von Joachim Ritter, Bd. 3

(Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1974), 1132-1137.

- (17) G. Gervinus, *Grundzüge der Historik* (Leipzig: , 1837), reprinted in: *Schriften zur Literatur* (Berlin, 1962), cited in Luther Gall, „Georg Gottfried Gervinus,” in *Deutsche Historiker*, Bd. 5, hrsg. H.-U. Wehler (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1972), 25, n. 4. “*ローゼンハフ『史学論』のなかの『書』と言及つてゐる*” (*Historik* (Peter Leyh), 51, 217, u. a.)。なお “*ローゼンハフ Wilhelm Wachsmuth, Entwurf einer Theorie der Geschichte* (Halle: Hemmerde und Schwetschke, 1820) を「彼『Historik』と呼ぶところ」(*Historik* (Peter Leyh), 236)。

- (18) August Boeckh, *Encklopiädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1877), 338; zweite Auflage besorgt von Rudolf Klussmann (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1886), 344.

- (19) とはいえず、このような判断を下すためには細心の注意を払う必要がある。というのは、注1にも記したように、ベークはこの講義を一八〇九年から一八六五年にかけて通算二十六回も行なっており、それらの講義ノートに基づいて門弟のプラトゥスヘックが編纂した本書からは、この引用箇所初出の時期を特定することは不可能だからである。ドロイゼンが「歴史学のエンチクロペディーおよび方法論」に関する講義を始めたのは、一八五七年のことであり、『史学綱要』の手書きの初版が出版されたのもこの時期なので、ベークが講義のなかで *Historie* に言及した最初の時が、ドロイゼンの講義に先立っている可能性は高い。しかし引用箇所のすぐあとで、ドロイゼンの『史学綱要』への参照が記されているので、*Historik* についてのベークの言及が、一八五七年以降のものであることも大いに考えられる。但し、そこで引証されている『史学綱要』の初版の刊行年は、一八六七年となっているので、この参照事項についての記述自体はプラトゥスヘックならびにクルスマンの手によるものと見なすべきであろう。

- (20) Blanke, „Johann Gustav Droysens *Historik*,” 27.

- (21) *Johann Gustav Droysens Briefwechsel (BW)* II Nr. 573, S. 54f. (An Heinrich von Sybel, 13. 2. 1852); ND in: ders.: *Historik* (Peter Leyh), 2, 2, 352.

- (22) *Historik* (Peter Leyh), 418.

- (23) *Vorlesungen*, 424.
- (24) *Ibid.*, 425.
- (25) *Historik* (Peter Leyh), 418 (傍点筆者).
- (26) *Ibid.*, 419.
- (27) *Ibid.*, 421.
- (28) *Ibid.*, 422. なお、この「過ぎ去らぬもの」は、『史学論』本体のなかでは、「残余、残存物」(*Überreste*)ならびに「記念碑、記念物」(*Denkmale*)と表記されている (*Historik* (Peter Leyh), 71-87)。

- (29) *Ibid.*
- (30) *Ibid.*, 422
- (31) *Ibid.*, 423.
- (32) *Ibid.*, 20.
- (33) *Ibid.*, 21.
- (34) *Ibid.*, 22 (傍点筆者).
- (35) *Ibid.*
- (36) *Ibid.*
- (37) *Ibid.*, 423.
- (38) *Ibid.*, 64.
- (39) *Ibid.*, 283.
- (40) *Vorlesungen*, 22.

(41) ドロイゼンは *forschen* / *Forschung* と同時に、*erforschen* / *Erforschung* という語も用いているが、われわれの見る限り、両者の間に意味上の大きな相違はないように思われる。*er-*は自動詞を他動詞にする際に用いられる前綴りなので、*forschen* と *erforschen* の違いは、単に自動詞か他動詞かというだけであろう。したがって、引用に際してはいずれも「探究(する)」と翻訳することにする。

- (42) ドロイゼンが私淑したフンボルトも同様で、前者に大きな影響を与えたと考えられる「歴史家の課題について」という論文も、原題は「Ueber die Aufgabe des Geschichtsschreibers」となっており、また論文中でも「歴史の Geschichtsschreiber」という語が用いられている。Cf. Wilhelm von Humboldt, „Ueber die Aufgabe des Geschichtsschreibers,“ in: *Werke in Fünf Bänden*, Bd. I, 585-606.
- (43) *Vorlesungen*, 83-84. なお、われわれは「Forscher」を「研究者」、forschend を「探究しつつ」と訳したが、forschen / Forschung は本来的に「探究」と「研究」の両方の意味を持っている。どの場合に「探究」あるいは「研究」とするかは、ひとえに日本語の文脈によっており、原語においては違いがないことをお断りしておきたい。
- (44) Wolfgang Hardwig, „Konzeption und Begriff der Forschung in der deutschen Historie des 19. Jahrhunderts,“ in: *Konzeption und Begriff der Forschung in den Wissenschaften des 19. Jahrhunderts*. Referate und Diskussionen des 10. wissenschaftstheoretischen Kolloquiums 1975, herausgegeben von Alwin Diemer (Meisenheim am Glan: Verlag Anton Hain, 1978), 11-26; hier 19.
- (45) *Vorlesungen*, 83.
- (46) *Ibid.*, 133.
- (47) *Historik* (Peter Leyh), 420.
- (48) *Historik* (Peter Leyh), 419.
- (49) Wilhelm von Humboldt, „Ueber die innere und äussere Organisation der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin (1810),“ in: *Werke in Fünf Bänden*, Bd. IV, 255-266; hier 256.
- (50) Wilhelm von Humboldt, „Ideen zu einem Versuch, die Gränzen der Wirksamkeit des Staats zu bestimmen,“ in: *Werke in Fünf Bänden*, Bd. I, 56-233; hier 57. 指摘するまじきまなく、フンボルトのこの言葉は有名な Lessingwort を彷彿させるものである。念のために以下に引用しておく。
- 「人間の価値は、誰かある人が所有している真理、あるいは所有している真理ではなく、真理に到達するためにその人が払った誠実な努力にある。というのも、人間の力は、所有によってではなく、真理の探求

よって増すからであり、人間の完全性が絶えず成長するのは、ひとえに真理のかかる探求によるからである。所有は沈滞させ、怠惰にし、傲慢にする――

もしも神が右手に一切の真理を、左手に真理を探索せんとするただ一つの常に生き生きとした衝動を握り給い、わたしに《選べ》と言われるとしたら、たとえ後者には不断にまた永久に迷わすであろうという仰せ言が付け加えられていようと、わたしは慎ましく神の左手にすがり、《父よ、これを与えたまえ。純粹の真理はひとえにあな

たのみのものなれば》と言うであらう。」Gottfried Ephraim Lessing, LM13, 23-24; G8, 32-33 (Duplik).
なお、Lessingwort に関しては、拙著『歴史と探求―レッシング・トレルチ・ニーバー―』（聖学院大学出版会、2001年）、29―49頁を参照されたい。

(51) Wilhelm von Humboldt, „Ueber die Bedingungen, unter denen Wissenschaft und Kunst in einem Volke gedeihen“, in: *Werke in Fünf Bänden*, Bd. I, 553-561; hier 559-560.

(52) フンボルトの学問観ならびに大学観については、ヘルムート・シエルスキー、田中昭徳・阿部謹也・中川勇治訳『大学の孤独と自由―ドイツの大学ならびにその改革の理念と形態―』（未来社、1970年）、98―106頁を参照のこと。

(53) オッター・ビンツェによれば、フンボルトのこの論文は「彼〔ドロイゼン〕において同質的な理解に出くわした」のである。Hintze, „Johann Gustav Droysen“, 496.

(54) Humboldt, „Ueber die Aufgabe des Geschichtsschreibers“, 585.

(55) Ibid., 587.

(56) Ibid., 588.

(57) Ibid., 589.

(58) Ibid., 590.

(59) Ibid., 602.

(60) Ibid., 603.

(61) Ibid., 604.

- (62) Ibid., 605
- (63) これについて Johann Adolf Goldfriedrich, *Die historische Ideenlehre in Deutschland* (Berlin : R. Gaertners Verlagsbuchhandlung, 1902) を参照のこと。「史的理念説の基礎づけ」(Die Begründung der historischen Ideenlehre) と題された第二章では、よくフンホルトに多くの頁が割かれている。
- (64) Horst Walter Blanke, „Droysen, Johann Gustav,“ in : *Historikerkexikon. Von der Antike bis zur Gegenwart*, herausgegeben von Rüdiger vom Bruch und Rainer A. Müller (München : Verlag C. H. Beck, 2002), 163.
- (65) *Historik* (Peter Leyh), 423.
- (66) 意外に思われるかもしれないが、ドロイゼンは Hermeneutik あることは hermeneutisch というドイツ語を一度も用いていない。確認できる事例はギリシア語の ἑρμηνεύω (epimnēuō) だけである。Cf. *Vorlesungen*, 324.
- こういう次第であるので、当然のことながら、「解釈学的循環」(ein hermeneutischer Zirkel) という用語も彼の著作のなかには見出されない。われわれが調べた範囲では、わずかに一箇所「循環」(Zirkel) について語られているだけである。 *Historik* (Peter Leyh), 162.
- (67) Ibid., 424.
- (68) Ibid., 398.
- (69) Johann Gustav Droysen, *Grundriß der Historik* (Leipzig : Verlag von Veit & Comp., 1868), 10 (傍点原文)。
- (70) *Vorlesungen*, 26.
- (71) *Historik* (Peter Leyh), 424.
- (72) Ibid., 424.
- (73) Ibid., 425.
- (74) Ibid., 435.
- (75) Ibid., 436.
- (76) Ibid., 441.
- (77) Ibid., 442.

(78) トレルチは、ドロイゼンによってその名が挙げられてはいないものの、とりわけ価値と共同体の体系に関して、ドロイゼンの『史学綱要』がシュライアーマッハーから靈感を受けている、との判断を示している。Ernst Troeltsch, KGA, 16, 1, 525-528; エルンスト・トレルチ、近藤勝彦『歴史主義とその諸問題(中)』(『トレルチ著作集』第五巻)(ヨルダン社、1982年) 127-130頁。

(79) Ibid., 424-425.

(80) 同様の事態はトレルチにおいても起こっている。トレルチにおいては「歴史学から倫理学への前進」は、明確に「歴史哲学という中間項を通して」生起するが(Cf. Ernst Troeltsch, KGA16, 1, 254-255)、他方のドロイゼンは、歴史哲学といえはヘーゲルの思弁的な歴史哲学のイメージが強いせい、か、「歴史哲学」という用語をあまり積極的に用いていない。しかしドロイゼンの場合には、史学論(Historie)そのものが歴史学と倫理学を仲介する構造になっており、実質的にはそれが歴史哲学の機能を果たしていると言つてもよい。Cf. *Wörterbuch der philosophischen Begriffe*, herausgegeben von Johannes Hoffmeister, 2. Aufl. (Hamburg: Felix Meiner, 1955), 301; *Historie* (Peter Leyh), 36, 44, 162, 233, 382.

(81) Ibid., 444.

(82) Ibid., 444.

(83) Annette Wilkau, *Historismus. Zur Geschichte des Begriffs und des Problems*, 2., durchgesehene Aufl. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1994), 25.

(84) *Historie* (Peter Leyh), 14.

(85) Ibid.

(86) Ibid., 44.

(87) Jörn Rüsen, *Konfigurationen des Historismus. Studien zur deutschen Wissenschaftskultur* (Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1993), 243-244.

(88) Cf. Herbert Schnädelbach, *Geschichtsphilosophie nach Hegel. Die Probleme des Historismus* (Freiburg / München: Verlag Karl Alber GmbH, 1974), 19-30; ヘルベルト・シュネーデルバッハ、古東哲明訳『ヘーゲル以後の歴史哲学』

(法政大学出版局、1994年) 21―36頁参照。

- (89) Troelsch, KGAI6, 1, 281: エルンスト・トレルチ、近藤勝彦『歴史主義とその諸問題(上)』(『トレルチ著作集』第四卷)(ヨルダン社、1980年) 158頁。
- (90) Friedrich Meinecke, *Werke*, Bd. 7, *Zur Geschichte der Geschichtsschreibung*, herausgegeben und eingeleitet von Eberhard Kessel (München: R. Oldenbourg, 1968), 169.
- (91) Leopold von Ranke, *Sämtliche Werke*, Bd. 33 / 34, VII.
- (92) *Historik* (Peter Leyh), 236.
- (93) *Vorlesungen*, 287.
- (94) Boeckh, *Enzyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, 10, 傍点を伏した部分は原文ではゲシュペルト(隔字体)。
- (95) *Vorlesungen*, 83.
- (96) *Vorlesungen*, 316.
- (97) *Historik* (Peter Leyh), 444.
- (98) Friedrich Meinecke, „J. G. Droysen, sein Briefwechsel und seine Geschichtsschreibung“ in: *Werke*, Bd. 7, 127.
- (99) イェルン・リューズン、三吉敏博訳「ヨハン・グスタフ・ドロイゼン」、H.-U. ヴェーラー編『ドイツの歴史家』第一巻(未来社、1982年) 152頁。Jörn Rüsen, „Johann Gustav Droysen,“ in: *Deutsche Historiker II*, herausgegeben von H.-U. Wehler (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1971), 14.
- (100) Hayden White, “Droysen’s Historik: Historical Writing as a Bourgeois Science,” in: *The Content of the Form: Narrative Discourse and Historical Representation* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1987), 83–103. ハイデン・ホワイトは、ドロイゼンの『史学論』を「ブルジョア的イデオロギーの理論的原理を展開したものにはかならない」と見なしているが(86)、このことは決して単にネガティブな意味で言われているのではない。彼の「イデオロギー」という用語の語法は、フランスの構造主義哲学者ルイ・アルテュセル(Louis Althusser, 1918–1990) に倣っており、社会的現実のなかで表象が果たする種の実践的機能が言い表されている

(cf. 88-89)。しかし「ブルジョア的科学」という呼称は、アルテュセールの用語法に不案内な一般読者には、明らかに軽蔑的な意味合いを含んでいるので、この語の一人歩きには十分な警戒を要する。

- (101) Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke*, Bd. 1, *Hermeneutik I: Wahrheit und Methode* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1990), 220; H. G. ガダマー、轡田 収・卷田悦郎訳『真理と方法Ⅱ』(法政大学出版局、2008年)、351頁。